

# 日本における洋服受容の過程

## 明治後期

The Process of Acceptance of European Clothes in Japan :  
In the Latter Years of the Meiji Era

(1997年4月2日受理)

宇野保子  
Yasuko Uno

Key words : 洋服受容, 洋装化, 洋服裁縫

### はじめに

明治維新の変革期には、政治経済の近代化とともに生活全般の近代化が推し進められた。衣生活に関しては、この時期の服装の改革が日本人の洋装化の起点となり現代の衣生活につながっていると考えられる。このため現代の衣生活の源流を探る目的で、明治以降の洋服受容の過程をテーマとしてきた。明治以降の洋装化に関連した研究としては、中山千代氏の労作「日本婦人洋装史」<sup>1)</sup>の他、断片的に女子洋装の変遷をまとめた報告があり、しだいにその全容が明らかにされつつある。しかし、日本の近代化の流れの中に衣生活の洋装化を明確に位置づけた研究はまだ見られない。

これまでの研究「日本における洋服受容の過程・明治前期<sup>2)</sup>・明治中期<sup>3)</sup>」により明らかにしてきたのは以下のようなことである。明治前期は、軍服、礼服、職能服など政治的要請に基づく洋服が着用された。中期以降は、憲法発布、国会開設、銀行や株式会社の設立など政府の近代化政策の実現とともにこれらの新しい機構の中で働く人々によって受容された。職場や、公式の場で着用される男子の洋服に対して、社会進出の閉ざされていた女子の洋装化はほとんど進まなかった。明治16,7年を中心になされた鹿鳴館のバウンススタイルは宮廷風俗の中にわずかに残った。それ以降は、極端な欧化政策の反動から洋装は姿を消し、30年代に入り内地雑居に絡んで、改良服が検討されるようになった。

本報は、これに続く20世紀（明治34年）頃からの明治後期についての研究である。なお、主な使用文献は、女学雑誌、風俗画報、新聞集成明治編年史、明治ニュース事典などである。

## 1. 男子服の洋装化

### 1-1 一般への普及

男子洋服は、前代に引き続き、明治30年代のめざましい産業の発達のもと設立された銀行<sup>4)</sup>や、株式会社などの新しい機構の中で働く人々によって盛んに受容された。この間の様子は、風俗画報の流行門や、この時期に発刊された洋裁書のはしがきなどから知ることができる。たとえば明治35年の風俗画報には、

従来洋服は、一寸人品が豪さうに見られ、之を召さるる方は、凡て紳士とか官吏に限れるものやうに思はれしが、跳び廻る仕事には、和服の婆娑婆娑せるに優れりとして、近来商家等にも着用するもの多く見ゆることなるが、その風采の如何は兎に角、実利上、甚だ嘉みすべきことにぞある。<sup>5)</sup>

とあり、男子の洋服着用者の広がりを知ることができる。また、明治41年発行の「ミシン裁縫独案内」にも以下のような記述がみられる。

現今に一般の人士が軽便と実利とを感じ来るの結果として、洋服の着用者は年と共に増加し、五十万の軍人二百万の学生を始め諸官銀行株式会等の通勤者より一般の商人職工に至るまで日常の着用者は国内に於て其数無量五百余万人に及ぶ<sup>6)</sup>

さらにこのことを裏付けるように、断腸亭日記の中にも

日露戦争この方十年來到処予の目につくは軍人ともつかず学生ともつかぬ一種の制服姿なり。

市中電車の雇鉄道員の役人、軍人の馬丁、銀行会社の小使なぞ、此等の者殆ど学生と混同してとの記述や

夏となればまた制服ならぬ一種の制服目につくなり。銀行会社は重役頭取より下は薄給の臨時雇のものに至るまで申合せたるやうに白き立襟の洋服を着し、<sup>7)</sup>

との表現が見られる。

此等を総合すると、明治初年から政府主導型の近代化政策の一環として政府高官や一部の知識階級に着用されてきた洋服が、明治後期には一般の通勤者、商工業者の仕事着として普及したことがわかる。

### 1-2 流行スタイル

次に、この間の流行の洋服の特徴を風俗画報の記述をもとにまとめてみる。表1に示すように礼服から通常服に至るまで殆どの洋服を網羅している。また、それぞれの洋服について地質や、仕立ての詳細な記述があり、帽子や靴などの小物や付属品についても言及している。表に従って、この時代の男子洋服について概観する。

明治33年頃には、胸の開きがやや狭く、ズボンの裾が細いものが流行していた。<sup>8)</sup>その後35年には、胸の開きの広いものに流行の中心が移っている。40年代には、米国式と、英国式の違いについても語られるようになっている。<sup>9)</sup>続いて41年には次のような記述が見られる。

表1 明治後期男子洋服の流行（風俗画報より作成）

	全体の特徴	燕尾服	モーニングコート	フロックコート	背広	その他
明治33年	<ul style="list-style-type: none"> <li>・胸の開きがやや狭く、ズボンの裾は、細い。</li> <li>・チョッキのボタンは2行が主流。</li> <li>・一般によく着用されているのは、フロックコートと背広。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・表は黒縹子目綾、黒無地羅紗</li> <li>・裏は仏蘭西絹</li> </ul> <p>40円~50円</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・表は黒又は紺綾羅紗、ルトン、ズボンは堅縹羅紗</li> <li>・裏は黒毛縹子アガカ</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・縹子目綾、黒無地羅紗の三つ揃か、ズボンを藍鼠紺茶色などの堅縹羅紗とし、黒琥珀の見返し付裏は仏蘭西絹</li> <li>・上着とチョッキを黒無地羅紗、ズボンを藍鼠地中堅縹の羅紗、或いは縹物か鼠茶の網代羅紗に紋織りのチョッキ</li> </ul> <p>45円~50円</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・藍黒の霜降ルトン、斜綾羅紗の三つ揃又はズボンを堅縹スコッチ、裏を共色の毛縹子か綾アガカ</li> <li>・両前背広は茶の格子のスコッチ、紺綾ルトン、玉丸、霜降太綾羅紗の三つ揃</li> </ul> <p>25円~30円</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・タシード</li> <li>・オーバークート</li> <li>・ロングコート</li> <li>・インバネ</li> <li>・吾妻コート</li> <li>・帽子</li> <li>・靴下</li> <li>・靴</li> </ul>
明治35年	<ul style="list-style-type: none"> <li>・紳士、官吏の他商家などにも着用者あり</li> <li>・従来の胸の開きの詰まった物より、開いた物が流行。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・地質は、黒無地綾からベキエナ（ルトン地質様）</li> <li>・仕立は、衿の返しを全部絹に、花挿しの穴は、三個から上部に</li> <li>・チョッキのボタンの数は3、4個対の物は儀式用、普通は、白地か変縹</li> <li>・ズボンは小柄の縹、寸法は膝で18インチ半裾口で18インチの幅</li> </ul> <p>48円~78円</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・地質はフビエルト類の黒、ウォステット堅縹、スコットの霜降</li> <li>・黒地は、衿幅狭く袖口は本開、ボタンは3個、右腰に小さなポケット、丈は膝より2寸短い</li> <li>・縹地は、胸腰の両方に蓋つきのポケットを附し総縫目を二重飾に</li> <li>・チョッキは胸のふわりと開いた物が流行</li> <li>・ズボンは、堅縹の大柄</li> </ul> <p>32円~62円</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・地質はルトン、黒の三つ揃は改まりすぎるのでチョッキに変縹を使用</li> <li>・仕立ては、胸開が一寸方開き丸衿、肩幅を大きく見せるため反り襟は大きく付けない</li> <li>・丈は1インチ半短く袖口は本開</li> <li>・ズボンは堅縹か細かい柄の地味な物</li> </ul> <p>34円~78円</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・地質は黒、紺羅紗、霜降堅縹、黒鼠飛白</li> <li>・仕立ては、衿を小さく肩を高く広くし裾に角味</li> <li>・胸の狭い人は胸ポケットをつけない物も可</li> <li>・上着のボタンは3個が新型</li> <li>・チョッキは、上着と対が大流行</li> </ul> <p>23円~45円 25円~49円</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・外套</li> <li>・獵衣</li> </ul>
明治38年	<ul style="list-style-type: none"> <li>・背広のシングルとダブルのそれぞれの流行が見られた。</li> </ul>		<ul style="list-style-type: none"> <li>・地質は、ルトンの黒紺</li> <li>・ズボンはフロックよりすこし派手な物</li> </ul> <p>28円~45円</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・地質は、ルトンと縹子目綾絨の黒</li> <li>・ズボンはごく地味な縦縹霜降羅紗</li> <li>・丈は、膝頭位のやや長めが流行</li> </ul> <p>35円~60円</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・片前は、藍鼠、濃い鼠、霜降ルトン、スコッチ、綾絨、両前は黒、紺綾ルトン玉丸、霜降、太綾織り等</li> <li>・本年の流行はルトン、霜降羅紗、縹スコッチ</li> </ul> <p>18円~35円</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・外套</li> <li>・インバネ</li> <li>・吾妻コート</li> <li>・トビ</li> <li>・銃獵服</li> </ul>

	全体の特徴	燕尾服	モーニングコート	フロックコート	背広	その他
明治40年	<ul style="list-style-type: none"> <li>・朦朧として、鮮明でない縞柄が好まれる</li> <li>・英国式と、米国式の仕立てがあり英国式の需要が多くなった</li> </ul>		<ul style="list-style-type: none"> <li>・地質は、霜降り紺、黒等のムトン</li> <li>・縞羅紗、縞ムトンはハカマ風</li> <li>・衿が稍廣く丈の長い三ツ釦</li> <li>・腰部に自然な丸みを持たせる物が流行</li> </ul> <p>25円~50円</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・地質白露綾ムトン、無地綾</li> <li>・衿幅廣く、腰部を稍引きしめる</li> </ul> <p>38円~75円</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・格子縞羅紗、縞ムトン、縞スッチなど朦朧とした縞柄</li> <li>・色は黒、濃い鼠茶</li> <li>・一行の四つ釦に、衿の返りが稍狭めで、衿先の角度を鋭くした英国式が好まれる</li> <li>・丈が長く三カ所に馬乗りのついた米国式の需要はすくない</li> <li>・チョッキは、1行の六つ釦胸明き狭く衿の折り返のない坊主衿</li> <li>・ズボンに英国式が稍細め、米国式は太め</li> </ul> <p>18円~40円</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・オ-P-コート</li> </ul>
明治41年	<ul style="list-style-type: none"> <li>・派手な柄物は軽蔑され地味な目立たない縞物が流行。</li> <li>・洋服の仕立て方が進歩し、洋服屋ごとに客の希望により英国式と米国式が行われた</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・地質は、黒無地の縞子綾かブロードクロス類</li> <li>・胸折は、切り目のある物とない物が半々の流行</li> <li>・返り裏は、裏地と半切か琥珀</li> <li>・シャツは白無地、衿は立襟、衿飾りは白の蝶形</li> <li>・靴は黒塗革の釦掛け、帽子はシルクハット</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・黒無地のムトン縞子綾の稍毛羽立った物</li> <li>・ズボンはさっぱりした縞物</li> <li>・シャツは白無地、立ち襟、衿飾りはアスコットかフォルインハット</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・極端な流行はなく、不相変</li> <li>・長さは膝まで</li> <li>・チョッキは二重釦と単列釦が半々の流行</li> <li>・ズボンは堅縞</li> <li>・シャツは白無地、立襟</li> <li>・衿飾りはアスコットかフォルインハット</li> <li>・帽子はシルクハットか山高帽</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・地味な鼠縞、黒みを帯びた青地の目立たぬ縞物</li> <li>・英国式と、米国式あり</li> <li>・釦は、シングル2、3個忍び釦等あるが3個が無難</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・オ-P-コート</li> <li>・フェスタコート</li> </ul>

仕事着または旅行服として、最も便利なるものとして、背広の最も多く見受けらるるは、今更新しく云ふまでもなく、其流行の地柄は、兩三年前往々見受けたる如き、派手な縞ものはむしろ極端なる、否、野卑なるハイカラ式として軽蔑され日本人の性質から云ふても將欧米諸國の高等なる社会の風潮から云ふても常に重用せらるべき筈のヂミな鼠縞または黒味を帯びた青地の目立たぬ縞物最も多く流行するが如し<sup>10)</sup>

ここにはかつて江戸の日本人が和服に表現した「いき」の美意識に共通するところが多く、この

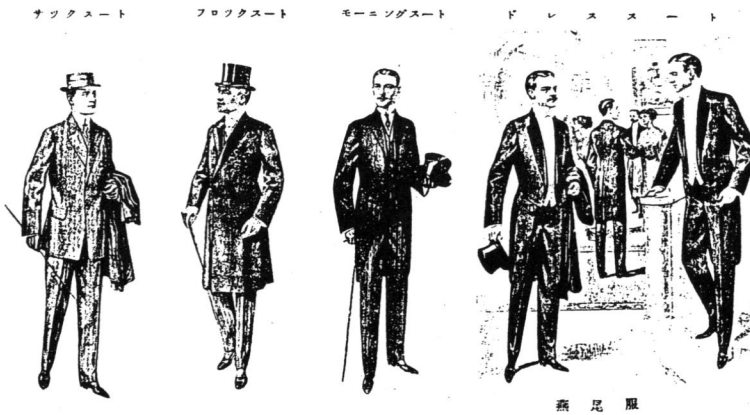


写真1 明治後期紳士の服装

ことは、明治初年から異文化として受容されてきた男子洋服がこの時期消化吸収されて次第に日本人の生活に同化してきたものととらえることができる。

## 2. 女子服の洋装化

### 2-1 宮廷服

女子の洋服は、鹿鳴館に象徴される極端な欧化政策の反動で殆ど着用されなくなっていた。しかしこの間も宮中では、女子宮廷服として洋服が採用されていた。

宮中の洋服については、明治40年の風俗画報に記されている。それによれば、「元旦の朝拝には大礼服としてローブデコルテに絹の手袋と靴下を着用し、夜会服にもローブデコルテを用いる。天長節、紀元節には中礼服のローブ・ド・モンタンを、観菊、観桜の宴や謁見の場合にはビジティングドレスを用いる。<sup>11)</sup>」など宮中の公式行事にはすべて洋服が着用されていたことがわかる。服地は西陣の織物を用いていたが、調度局から直接フランスに注文していたことも記されている。注文を受けるフランスの洋服店では、各国皇族、貴族の全身模型を用意したという。上等なフランス絹に立体裁断の技術を駆使した高価なドレスであった。

このような洋装の宮廷服を着用しての公式行事に参列した外国人に、東宮の侍医をつとめるベルツがいた。彼は、明治37年1月1日の日記に「妃は白の洋装で、いつものようにお優しくお美しい。お気の毒に、3メートルは優にある重い長い裾で、歩くのにとってもお困りだろう。<sup>12)</sup>」と記している。

写真2が、このベルツの見た東宮妃着用の中礼服であるこのドレスは、ワンピース型に見えるが、ウエストで上衣とスカートに分かれるツーピースの構成になっている<sup>13)</sup> 上衣はボーンを入れて形を整え、ウエストの内側のインサイドベル



写真2 東宮妃着用中礼服

トで固定している。

## 2-2 女子洋装の増加

上記のような近代天皇制の中で行われた洋式行事の他にもこの頃の女子洋装をうかがわせる記述をあげることができる。

まず、「明治36年3月の第5回内国勸業博覧会式場の参列に羽織袴の着用が禁じられたので、紳士はもとより、婦人服を調整するものが非常に多かった<sup>14)</sup>」との記述があり、39年6月には「このごろ洋服を着して外出するもの中流以上の婦人令嬢の間に見かけること多し<sup>15)</sup>」と報じられている。このほか41年に発刊された洋裁書の中にも「このごろ婦人子供の洋服着用者が著しく増加して参りました<sup>16)</sup>」の記述が見られる。

日清日露の戦争後、資本主義の発達に伴い拡大したブルジョア層の女性達に社交服、外出着として次第に洋服が着用されていったものと思われる。

この頃の女子洋装のデザインについては、風俗画報332号の記述に「袖着を多くして、袖先をなるべく細くする等以前とは正反対にしてカフスの袖も広くなり、大抵五吋より八吋を用い、胸は平らかなるを喜び、胴前の膨らみは思ひ切つて豊かに、また胴は出来るだけ細きを可しとせり<sup>17)</sup>」とあるので、ハイカラー、ゴアード・スカート、レグ・オブ・マトン・ド・スリーブを特徴とする写真3のようなデザインと考えられる。



写真3 ハイカラー、ゴアード・スカートのドレス

これはちょうど1890年から1900年にヨーロッパで流行したスタイルでやや遅れて1906年の日本で見られたものと推察される。このスタイルは、宮廷服と同様良質の日本製白絹地をフランスで染色加工した世界最良の絹を使用し、高度な技術を必要とする立体裁断で入念に仕立てられたものだった。

このためドレスの値段は、「常服で30円より40円その他好みを云えば150円から160円、礼服では、大礼服が150円から300円、中礼服は50円から150円、これも好み次第では400円のものもある<sup>18)</sup>」と言う状態だった。これを当時の大卒公務員の初任給月俸50円、銀行員の35円と比べると一般庶民の生活にはほど遠いものだった。総理大臣の年俸12000円<sup>19)</sup>と比較しても大変な額で上流階級にとっても高価な買い物であったことがわかる。

## 2-3 女性の職業と洋装化

前節の様な高価なドレスに対して、従来の和服の非機能性を補うための実用的な被服として受容された洋服もいくつか見られた。

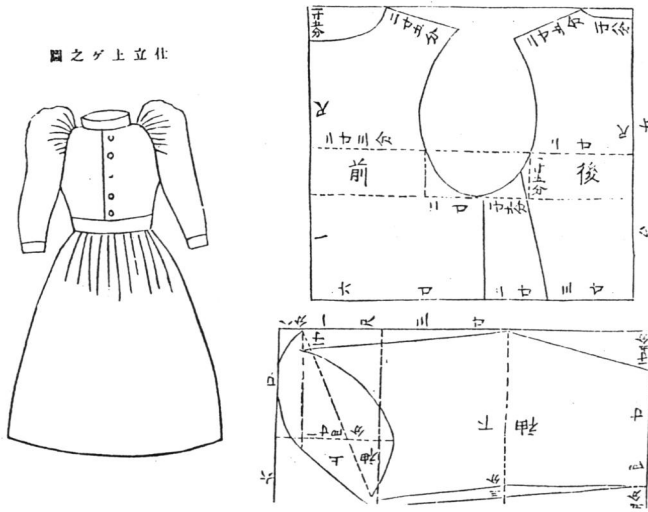


写真4 看護服

されたものと考えられる。写真4は、「ミシン裁縫独案内」に紹介されている看護服である。<sup>21)</sup> マトン・ド・スリーブや、ハイカラーなどヨーロッパの流行を取り入れたワンピース型の職務服であった。

このほか女性の職業として、女優<sup>22)</sup>、西洋音楽隊等<sup>23)</sup>の新しい職業がみられ洋服が採用されたことが知られている。

また19世紀後半のヨーロッパでは、スポーツが盛んになり女性も自転車、乗馬、海水浴などを楽しむ生活様式が生まれてきた。この傾向はしだいに日本にも現れ、スポーツ服としての洋服が見られるようになった。写真5に示すのはその一例であるが、風俗画報169号の表紙を飾ったもので、麦藁帽子に、当時としては大胆な水着姿の女性が描かれている。<sup>24)</sup>

次に、これまででも新しい風俗の担い手となってきた女学生についてであるが、明治32年に高等女学校令が公布され各地に女学校が開校し、続いて津田英学塾や女子医学校、日本女子大学校が設立され、高等女子教育の基礎が確立し、女子学生の数が飛躍的に増えた。女学生にはすでに筒袖、袴姿が定着し、改良服が奨励されていたが、学校教育に必要な体育の服装が残された課題だった。

東京女子高等師範学校では、アメリカ留学を終えて帰国した井口アグリにより、アメリカ式体操服を制定、日本女子大学校でも洋服を採用し、東京名物の同校の運動会で洋服姿のデルサートが紹介された。しかし、多くの地方の女学校では、たすき掛けで和服の袖をおさえたり、袴の裾をひもでしめてブルマー風にするなどの工夫をして学校体育を行っていた。

女子教育が普及し働く女性の分野もわずかに開かれてきたこの時期、女子の職業服としてまず成立したのが看護服であった。日清戦争勃発時には、「日赤や同志社等から600人の看護婦が従軍した。」ことや、「明治33年の北清事変からは、海上勤務も始まり、病院船の博愛丸や高裁丸等に約700人の看護婦が乗り組み傷病兵の看護にあたった<sup>20)</sup>」などの記述から、従来の和服ではその勤務が果たせず、洋装スタイルの看護服が採用



写真5 明治後期の水着

## 2-4 洋服裁縫と女子洋装

明治後期は、高等女子教育の基礎が確立した時期であったが、女子の職業教育のための学校の設立も見逃すことが出来ない。明治39年10月麴町区有楽町1丁目に新築になったシンガーミシン裁縫女学院の開校式が行われている。<sup>29)</sup> これは日本最初の洋裁専門学校であり、日本女性に対する洋裁の普及とシンガーの直営店の洋裁教師を養成する目的で設立された。ここで、女性がミシンを使って洋服を縫う技術を習得するようになった。また既存の女学校や専門学校でも洋服裁縫を取り入れるようになっており、明治40年の東京勸業博覧会には共立女子職業学校が婦人洋服、帽子を出品している。ちょうどこの頃、多くの内容の充実した洋裁書が発刊され、子供服、洋装小物などの制作が詳しく記されている。これらの洋裁書の中には、型紙の通信販売の広告を出しているものも見られた。<sup>30)</sup>

女子の洋服着用者は一部の職業婦人や、ブルジョア層に限られていたが、裁縫の知識や技術としての洋装は、学校や、洋裁書を通して、広い範囲に普及したと考えられる。女子の洋装化は、「着用」よりも「裁縫」が先行した。この頃から、子供服や、洋装小物の受容が盛んになったのは、女性の家庭での洋服裁縫に負うところが大きい。

## おわりに

明治後期の洋装は、政府の近代化政策の実現に伴う近代産業の従事者である男子洋装、そこから生まれたブルジョア層の女性に受容された高価なドレス、近代天皇制に支えられた宮廷風俗としての洋装に特徴づけられる。

男子洋装は、広い範囲で受容され、その着装には、和服と共通する美意識も見られ、しだいに衣生活の中に大きな位置をしめるようになった。

女子の洋装は、一般の人たちにとっては、「洋服裁縫」という形で受け入れられた。女学校や洋裁の独習書から得られた洋服に対する知識や技術は、子供服や洋装小物の制作に役立ち、続く大正時代の生活改良へとつながるのである。

## 《引用文献》

- |         |                    |            |        |
|---------|--------------------|------------|--------|
| 1) 中山千代 | 日本婦人洋装史            | 吉川弘文館      | S.62.9 |
| 2) 桜井保子 | 日本における洋服受容の過程 明治前期 | 中国短期大学紀要13 | 1982.3 |
| 3) 宇野保子 | 日本における洋服受容の過程 明治中期 | 中国短期大学紀要16 | 1985.3 |
| 4) 加藤俊彦 | 本邦銀行史論             | 東京大学出版会    | 1957   |

「1882年に日本銀行が設立されて以来日清戦争後にはおびたしい数の銀行が新設され、1901年のピーク時には1890の普通銀行と444の貯蓄銀行、51の特殊銀行が存在した」という。



日本における洋服受容の過程

- 5) 風俗画報 260号 M.35.11.10  
 6) 木村鶴吉 ミシン裁縫独案内 岩井活版所 M.41.12.28  
 7) 永井荷風 洋服論 1916.8.11「文明」に掲載 断腸亭日記 岩波書店  
 8) 風俗画報 223号 M.33.12.25 東陽堂  
 9) 風俗画報 261号 M.35.12.10 東陽堂  
 10) 風俗画報 381号 M.41.3.10 東陽堂  
 11) 風俗画報 332号 M.39.1.10 東陽堂  
 12) トク・ベルツ 菅沼竜太郎訳 ベルツの日記 岩波書店 1966  
 13) 中山千代 日本婦人洋装史 吉川弘文館 S.62.9  
 14) 大阪洋服商同業組合編 日本洋服沿革史 S.5  
 15) 女子時事新聞 M.39.6 新聞集成明治編年史 財政経済学会  
 16) 木村鶴吉 ミシン裁縫独案内 岩井活版所 M.41.12.28  
 17) 風俗画報 332号 M.39.1.10 東陽堂  
 18) 風俗画報 332号 M.39.1.10 東陽堂  
 19) 週刊朝日編 値段の風俗 朝日新聞社 S.57.11.30 と風俗画報から宇野が作成

	明治40年	明治44	昭和55
背 広	20	20	120,000
婦 人 常 服	30~40		
婦人中礼服	50~150		
婦人大礼服	150~300		
銀 行 員	35	40	103,000
公 務 員	50	55	101,600
総 理 大 臣	1,000	1,000	880,000

(出典)  
 上原洋服店  
 東京紳士服協同組合  
 風俗画報  
 第一勧業銀行  
 東京都人事委員会  
 総理府人事院給与課

- 20) 牧野喜久男 一億人の昭和史日本人 三代の女たち 毎日新聞社 1981.2.25  
 21) 木村鶴吉 ミシン裁縫独案内 岩井活版所 M.41.12.28  
 22) 東京二六新聞 M.41.8.12 新聞集成明治編年史 財政経済学会  
 23) 女学雑誌 518号 M.36.7.25  
 24) 風俗画報 369号 M.35.3.26 東陽堂  
 25) 読売新聞 M.39.10.22 明治ニュース事典 毎日コミュニケーションズ  
 「普通科3ヶ月, 高等科2ヶ月, 他に研究科3ヶ月に分ち, 普通科はホワイト襪衣,  
 靴下ズボン下等, 日常の必需品を調整しうる技能を授け, 研究科に入れば, さっそく黒  
 人を凌ぐべき技術充分に備わる。」との広告が見られる。  
 26) 宇野保子 明治後期の洋裁書とその周辺 中国短期大学紀要24 1993.6